

第1部門は、生活手段、第二部門は機械と原料（生産手段）、第三部門は、総再生産です。総再生産過程の経済表は、生産物を巡る社会的諸階級の相互関係が一目瞭然と判ります。マルクスが言うようにこの経済表は、「資本論」最後の章に総括として現れるもので、資本主義的生産様式をとる歴史的社会的鑑（かがみ）といえるものです。これは「資本論について関する手紙」（P 129～P 134）に翻訳があります。以下は、マルクスの経済表の解説でエンゲルスに宛てた手紙（1863.7.6）から抜粋です。

同封の「経済表」は僕がケネーの表の代わりに立てるものだが、もし君がこの暑さのなかでもできるなら、いくらか念入りに見てくれたまえ。そして、なにか疑念があったら知らせてくれたまえ。これは総生産過程を包括している。

君も知るように、アダム・スミスは「自然価格」または「必要価格」を賃金と利潤（利子）と地代とから構成している――したがって全体を収入に解消させている。この不合理はリカードにも伝えられている。といってもリカードは地代をたんに偶然的なものとしてカタログから除いてはいるのだが。ほとんどすべての経済学者がこれをスミスから受け継いでいる。そして、これに反対する経済学者らはまた別の不条理に陥っている。

スミス自身も、社会にとっての総生産物をたんなる収入（年々消費されうるもの）に解消させることの不合理は感じていて、他方で各個の生産部門については価格を（原料や機械など）と収入（労働、利潤、地代）とに分解している。そうすると、社会は毎年新しく資本なしで始めなければならないことになるだろう。

ところで、僕の表について言えば、これは僕の本の最後のうちの一章のなかに総括として載せるものだが、そこでは理解のために次のことが必要だ。

- （1）数字はどうしてもかまわない。何百万かを意味するものとしてもよい。
- （2）ここで生活手段というのは、消費財源の中に年々入っていく（または、この表からは、除外されている蓄積がなければ消費財源のなかに入りうるであろう）すべてのものことだ。

部類1（生活手段）では全生産物（700）が生活手段から成っており、したがって当然のこととして不変資本（原料や機械やなど）のなかには、はいつていかない。

同様に部類2では全生産物が、不変資本を形成する諸商品から、すなわち原料や機械として、ふたたび再生産過程にはいつていく諸商品から、成っている。

- （3）上昇線は点線になっており、下降線は直線になっている。
- （4）不変資本は、原料や機械から成っている資本部分だ。可変資本は、労働と交換される資本部分だ。
- （5）たとえば農業などでは同じ生産物（たとえば小麦）の一部分は生産手段を形成するが、他の一部分（たとえば小麦）はふたたびその現物形態のまま（たとえば種子として）原料として再生産にはいつていく。だが、これは少しも事柄を変えるものではない。というのは、このような生産部門は、一方の属性から見れば部類2のなかに現われ、他方の属性から見れば部類1のなかに現われるからだ。

- （6）そこで、全体の要点は次のようになる。

部類1。生活手段。労働材料と機械（すなわち機械のうち損耗分として年間生産物のなか

にはいつて行く部分。機械などの未消費部分は真のなかには全然現われていない) は例えば、400 ポンドに等しい。

労働と交換された可変資本 = 100 は、300 として再生産される。

というのは、労賃 (100) を生産物で補填し、200 は剰余価値 (不払剰余労働) を表わすからだ。

生産物は 700 であって、そのうち 400 は不変資本の価値を表わしているが、この不変資本 (原料・機械等) (400) は、全部が生産物のなかに移っており、したがって補填されなければならない。

可変資本 (100) と剰余価値 (200) との割合がこのようになっている場合には、労働者は労働日の三分の一では自分のために労働し、三分の二では彼の天成の目上 (natural superiors) のために労働する、ということが仮定されている。つまり、100 (可変資本) は、点線で示されているように、労賃として貨幣で払い出される。労働者はこの 100 をもって (下降線で示されているように) この部類の生産物すなわち生活手段を 100 だけを買う。こうしてこの貨幣 (100) は資本家階級 (1、生活手段生産資本家階級) に還流する。

剰余価値 200 は一般的な形態では利潤だが、これは、産業利潤 (商業利潤を含む) とさらに、産業資本家が貨幣で支払う利子と、彼がやはり貨幣で支払う地代とに分かれる。この産業利潤や利子や地代として支払われた貨幣 (200) は、それをもって部類 1 (生活手段) の生産物が買われることによって、還流する (下降線で示されている)。

こうして、部類 1 の内部で産業資本家によって投げられたすべての貨幣は、生産物 700 のうちの 300 が労働者や企業家や金持ちや地主によって消費されるあいだに、彼のもとに還流する。部類 1に残っているのは、生産物の過剰分 (生活手段での) 400 と不変資本の不足分 400 とだ。次に、

部類 2。機械と原料。

この部類の全生産物は、生産物のうち不変資本を補填する部分だけではなく、労賃の等価と、剰余価値とを表わす部分も、原料と機械とから成っているので、この部類の収入は、それ自身の生産物においてではなく、ただ部類 1 の生産物 (生活手段) でのみ実現されることができる。

しかし、ここでなされているように蓄積を除外すれば、部類 1 が部類 2 から買うことができるのは、ただ部類 1 がその不変資本の補填のために必要とするだけの量であり、他方、部類 2 はその生産物のうち、ただ労賃と剰余価値と (収入=所得) を表わす部分だけが部類 1 の生産物 (生活手段) に投ずる (=交換する) ことができる。こうして、部類 2 の労働者たち (不変資本生産者) はその貨幣、一三三三分の 1 を部類 1 の生産物 (生活手段) に投ずる。

同じことは、部類 2 の剰余価値でも行なわれる。これは、部類 1 におけると同様に、産業利潤と利子と地代とに分かれる。こうして貨幣での 400 が部類 2 から部類 1 の産業資本家のもとに流れて行き、そのかわりに部類 1 はその生産物の残り (400) を部類 2 に引き渡す。

この貨幣 400 をもって、部類 1 はその不変資本 (400) の補填のために必要な物を部類 2 から買い、このようにして部類 2 には、労賃と消費 (産業資本家自身や金持ちや地主の) に支出された貨幣がふたたび流れこんでいく。そこで、部類 2 にはその総生産物のうち、

五三三三分の1が残っており、それをもって部類2はそれ自身の損耗した不変資本を補填する。

一部分は、部類1の内部で行なわれ、一部分は、部類1と2とのあいだで行なわれる運動は、同時に、どのようにして両部類のそれぞれの産業資本家たちのもとに、彼らがふたたび新たに労賃や利子や地代を支払うための貨幣が還流するか、ということを示している。

部類3は、総再生産を表わしている。

部類2の総生産物は、ここでは全社会の不変資本として現われ、部類1の総生産物は、生産物のうちの、可変資本（労賃の財源）および互いに剰余価値を分け合う諸階級の収入を補填する部分として、現われる。

ケネーの表をその下に置いておいた。これはこの次の手紙で簡単に説明しよう。

失敬

君の K・M

ついでに。エトガル・バウアーは職を得た — プロイセンの新聞局で。